

青春ルンるん

石田博樹(長岡工業高等専門学校)

ある日、つかの間の冬の日だまりの中で、ふと、こんな話し声を小耳にはさんだ。立ち聞きしていたようで悪いから、大きな声じゃ言えないから、ここだけの話として、こっそりと紹介しよう。

「今度、おれ達の学科で文集を作るんだってな。教官も含めて、皆が何かを必ず書くことになっているらしいよ」

「教官の人柄なんか、授業の時以外には、おれ達には分からないよな。学生同士の中でも、日頃付き合っている奴以外は、誰がどんなことを考えてんだか、分からねえもんな」

「それで、教官も学生も、皆が必ず何か一つ書いて文集を作ろうってことになったらしいよ」

「授業を受けていない科目の教官の人柄なんて、寮や部活の先輩や同僚からの評判からしか分からないよな」

「あのさあ、教官だって、学生の頃は、当然あれこれの失敗もあったし、結構悪いこともやっていたんだろな。自分から言わないだけでさ」

「そりゃそうだろうな。酒飲んじゃ、かっこいい女や車の話だの、教官や授業のあれこれの文句や、天下国家を論じていたんじゃねえの」

「おれ達の学科の先生の半数ぐらいは、うちのおやじと同世代じゃねえの。おれ達のじいちゃん達が戦争から運良く生きて帰って来てさ、日本中のあちこちで子供がいっぱい生まれて、そのベビーブームの世代が、おれ達の親だろ。リストラの波をもろに受けている団塊の世代だよ」

「そうそう。教官の中には、学生の頃は、しょっちゅう酒飲んじゃフォークを歌っていたり、徹マンしていたり、いつもサークル活動室で恋愛論にあけくれたり、デモに行っていたりして、授業なんかには出なかった人もいるんじゃねえの。赤点も取ったと思うよ。うちのおやじが、おれはそれだったと言ってるよ」

「でもさ、そんな中でも、何かのきっかけで大学院での勉強の生活を始めて、それで結局、先生になっちゃったんじゃねえの。おれがとっている授業のあの先生なんか、多分その口だろうな。偉そうなこと言えねえよ、あの先生。話は面白いけどな」

「でもさ、ふったり、ふられたり、赤点を取ったり、留年したり、という人の方が先生としては面白いんじゃない」

「おれの担任の先生は、「一度も失敗の無かった奴なんてのは信用できない」って言ってたな」

「きれいごとばかりの奴じゃ、実際、とても信用できねえよな。第一、そんな奴、面白くも何ともねえじゃん」

「ところでさ、何でおれ達の電子制御工学科てのは、数物系の科目ばかり、学生をよくもこうまでシゴクんだらうね」

「へえ、そうなの？ おれの学科は、比較的甘いんじゃないかな」

「お前、大丈夫か？ 来年、上がる？」

「お前こそ、どうなんだ？ 前期の成績なんか、ひでえもんじゃない」

「おれ、応数も電磁気も物理学演習も、みんな青点だった。実際、勉強もしなかったけど」

「いや、それはお前だけじゃねえ。おれ達の学科は、3年生以上になると、数物系の科目が急に増えるし、おまけにほとんどの科目の先生が点数のゲタ上げなんかしてくれねえんだって」

「本気で勉強してかからねえ奴は、みんなボロボロと留年するんだってな」

「実際、おれ達の学科には、電制サバイバルなんて言葉があるじゃねえか」

「言い訳するわけじゃないけどさ、大体、この高専てのは、せっかく意欲に燃えて入学した学生を磨いていない学校だと思わねえか？ おれ、本当は、中学校の時はいつもトップクラスで、生徒会のまと

め役もしてたんだ。それが今じゃこんなで、自分でも情けないんだけど」

「基本的には、中学校を卒業して5年後に就職することを前提としている高専という学校のせいだよ。おれも、中学校の時からあこがれて高専に入学したんだけど、1,2年生の頃は、校内の余りの無気力な雰囲気になんかガックリして、こんな学校があってもいいものだろうか、といつも悩んでいた」

「普通の高校へ行けば良かったと思っている奴が、今もまわりにいっぱいいるよ。なあ」

「教官は、そのへんをどう思ってたさ？」

「ここは高専だから、それは仕方がないと思ってんじゃねえの」

「でもさ、高専を出れば、一応、就職には困らないし、それに国立大学の3年生へ楽に編入できる大きなメリットがあるじゃん。おれの地元の普通高校からは絶対に入れない大学なんかでも、高専からだと楽に編入できるじゃんか」

「お前、卒業後は、就職？ 大学編入？」

「大学へ編入したいけど、おれ、成績悪いしなあ。でも、高専卒だけで就職なんかすると、将来、すげえ損するっていうしなあ。転職率も高いんだって」

「高専での成績なんか編入学には関係ねえよ、今は。でも、理工系の場合は、実際、大学院の修士くらいを出ていないと、大企業に行けないし、また会社の研究開発の中核には入れないって、うちの親父も言っていたよ」

「もう20年くらい前から、高専なんかには、有名な大企業からの求人が来なくなっただけだよ」

「高専の専攻科へ行って、大卒の資格を取るという手もあるな」

「高専の専攻科は、授業料が大学の半額だし、大卒になれるし、JABEEも認定されるし、それに大学院を自由に選べるメリットがあるんだってな」

「おれは、進学も就職もまだ決めてねえよ。自分は何をやりたいのかが、まだ、分からねえんだ」

「でも、それは皆がそうだろう。おれ達は、そもそも、世の中にどんな職業があるのかが、まだ知らされていないんだよ。まだそのメニューを見せられてねえんじゃねえの。だから、自分がやりたいのはこれだって、今言える奴なんて、むしろ少ないと思うよ」

「大学への編入をしなかったら高専に来たメリットがないって、ある先生が言っていたな。就職はダメだ、家庭の事情が許す限りは、大学へ編入しろって。世の中には、大学へ行きたくても行けない人がいっぱいいるんだって」

「高専に入学したのに、大学へ編入しないなんてのは、映画を見に行き行って最後まで見ないで帰って来るようなもんだとおれの担任の先生も言っていたよ」

「自分は何をやりたいのかを見つけるのが大学だって。高専だけじゃ、そのメニューが見られないって。働くのはいつでも出来るけど、大学で学ぶのは、チャンスを逃したらできないのがこの日本だって、あの先生が言っていたな」

「数年前から、大学への編入がすげえ易くなっただけだよ。学生数が減ったせいらしいけど」

「実際、毎年留年ストレスだったクラブの先輩が、ちゃんと、国立大学の工学部に編入したもんな。でも、あんなで、大学の中でついていけるんだろかな」

「いや、あの先輩は、寮では、時々、真剣に勉強していたよ。大事なところは、ちゃんと押さえてたんじゃないの？」

「でも、編入試験に合格したからといって、学力が一定の水準に達しているとは言えねえじゃないの？ 高専じゃ学年制のために、数学、物理、英語なんか全部赤点でも、進級してしまえば、青点でなかったら、それらの単位を取ったことにされるじゃんか。それで、卒業もできるじゃんか。まじめにコツコツと勉強を積み上げるよりも、要領の良さが卒業の第一条件みたいだよな」

「多分、そのせいだろうけど、去年、ある国立大学の工学部の学科で、高専からの編入学者の、なんと半数もが落第したんだって」

「英語なんて、高専の5年間で、普通高校3年間分より少ない授業時間数だもんな。中学校の時には、おれは英語が得意だったんだけど、もうすっかり忘れちゃったよ」

「高専の学生は英語が全然ダメだなんて聞くと、ムツとするよ。高専のせいだって言ってやりたくないよ。英語で赤点取っても、進級や卒業に支障がねえんだもの」

「基礎科目みんなそうだよ。創立以来、中学校の秀才をたくさん集めて来た学校という割には、なんだか、基礎教育を粗末にしているような気がするなあ。真面目に勉強する気なんて全然なくなってしまいう理由も分かるよ。「もの作り実習」なんかで遊んでいていいのかな？ おれ達は。」

「おれの中学校の時の友達は、一緒に高専に合格したんだけど、普通高校へ行ったんだ。でも、今は、すごく勉強しているよ。大学入試があるせいもあって、その高校の中の雰囲気じゃ、勉強をやらざるをえないんだってさ」

「高専とは、だいぶ違うなあ。おれ達は高校生に負けてるんじゃないかな？」

「高専じゃ、成績がいいという奴だって、例えばあの大学入試センター試験の問題なんて、まともに解ける奴はねえんじゃないかな」

「俺たちの学科が、数物系の教育を特に重要視しているのは、どこへでも行ける、つぶしの効く人間を育てるためだとか、おれの担任の先生が言っていたな。基礎が出来ていればどこへ行っても、何とかやっていけるって」

「数物系科目のこうしたシゴキが、結局は、君達を強くしているんだと、何人かの先生もそう言っているよ」

「それはそうかもな。実際、先輩達は、国立大学の機械、物理、制御、数学、情報、電気、といったいろんな方面へたくさん編入しているよな」

「それにしても、うちの学科の先生達は、もうちょっとぐらい楽に合格点をくれねえもんかな。要領の良さだけじゃ、とても逃げきれねえもんかな、おれ達は」

「だめだよ、あの連中は。くれるわけがねえ。寮の先輩もそう言っていた。本気で勉強してかからねえと、どんどん赤点が付いてくるって。おれ達の学科の先生は、誰も甘くねえって」

「たださ、電磁気や物理学演習なんかは、大学へ編入したクラブの先輩が、試験、試験で、あの科目は大変だったけど、随分ためになったとか言ってたよ」

「学生による授業評価のアンケートの制度なんてのができたけど、あれはいいよな。おれ達から教官への声を上げる場がやっと出来たじゃん。アメリカの大学じゃ普通の習慣らしいけど」

「うん。高専の中には今だにそれを恐がっている先生もいるらしいけど、結局は、時代の流れで、定着したみてえだな」

「おれがとっている授業の先生は、自分の字も下手クソのくせに、字が汚くて答案が読めないとか、おれに言うんだ。だから、おれ、学年末の授業評価のアンケートに、先生こそペン字教室に通えって、書いておいたよ」

「いいんじゃない？ 学生からの率直な評価によって、先生も自分の仕事の改善になるじゃんか」

「あのヒゲ先生の英語演習じゃ、かなり日本語の特訓を受けたよな。あれ以来、おれ、普通のレポートでも、日本語の文章を書くのが何だか遅くなってきた」

「この日本じゃ、ウソ訳とウソ英語が氾濫しているんだってな。そんなのに騙されないために、きちんと英語を勉強しよう、って言っていたな」

「そしてさ、英語をペラペラしゃべれる能力なんかよりも、実は、日本の歴史と文化を自分の言葉で外国人に説明できる能力の方が、国際社会ではずっと大事なんだって。外国へ出ると。」

「ところで、あのヒゲ先生自身の日本語や、英語は大丈夫なんだろうか？」

「どうか。でも、おれ達よりはいいんじゃないかな。こんどの授業評価のアンケートには、いろいろ、いっぱい書いてやろっと」

「ともかく、いい点もらって平均点を上げて、進級しないと」

「高専でえのは、5年で卒業できるのは普通は8割くらいらしいじゃん。おれ達の学科は7割くらいらしいじゃん。留年や進路変更する奴も多いんだってな。本当？」

「本当らしいよ。でも、「進路変更は決して敗北にあらず」とおれの担任の先生は言ってるよ。」

「大半が悩んだ上での進路変更らしいけど、それはそれで胸を張って良い、って担任の先生が言っているよ。進路変更した人は、高専に負けてつぶれたという奴ばかりじゃないと思うよ。俺も」

「おれと同じ中学校から来た奴も、結局、高専をやめちゃったけど、いろいろな本を良く読んでいたし、いろんな社会問題について、しょっちゅう鋭い目でおれに話していたよ。いい奴だった」

「ああ、あいつか。今どうしている？ どんなことを話してた？」

「今は文科系の大学へ行っているよ。歴史とか、宗教のこととか、全てがとても真剣で、あいつと話をしていると、コンピュータゲームやマンガだのテレビやバイトだのに時間をつぶすことの一切が、幼稚で馬鹿らしく思えてきた。いい刺激になったよ」

「高専みたいなの、5年間もみんなが一緒にいるこんな単純なクラスの中では、むしろ、あいつは貴重な存在だったんじゃないか？」

「そうそう。あいつの方が、おれ達よりも、むしろ進んでいたんじゃないか？」

「いつも、「大体、おれ達は真実を教えられていない」とあいつは言うんだ」

「世の中には、太平洋戦争によって日本がアジアを解放してあげた、として賛美する奴や、南京大虐殺をウソだったとか言っている奴もいるな。従軍慰安婦問題なんかは見舞金が欲しい連中が騒いでいることだ、なんて言っている奴もいるぞ」

「東京都の教育委員会は、卒業式で君が代を歌わなかった先生を処分しているなあ。あの処分は憲法違反じゃねえのかな？」

「公害反対運動なんかは、金が欲しい奴等の住民エゴだ、なんていう評論家もいたな」

「小林よしのりのマンガで戦争論なんてのがあるだろ。図書館にもあるよ。おれの担任の先生は、それを始めの2,30ページ読んだだけで、バカらしくなって放り出したって」

「政治家や学者の中には戦争中の日本の責任を検証することを自虐趣味だなんて言う奴もいるぞ」

「中国や韓国で反日運動が今も時々起きるのは当たり前だよな」

「でもさ、以前から日本の中にあるそうした動きを、正確に伝えてくれたり、厳しく批判して、日本の将来を皆で考えさせるような授業が今までにあったかな？」

「授業の中で、そんなことを論議してくれた先生がいたかな？」

「高専をやめていったあいつは、日本が歩んできた歴史を、自分の目で勉強したい、と言っていた。あれはあれで、りっぱな進路変更だったと思うよ」

「それならさ、工業高専なんていう名前を廃止して、社会科学系の学科もある「総合高専」としたらいいと思わねえ？ そして、英語や社会科学の先生と授業科目をいっぱい増やすんだ」

「高専の中に、国際政治学科なんてのが出来たら、そこに行きたいな、おれは」

「おれは、経済学科ができれば、そこに入学して経済政策を勉強したいな」

「いいじゃん。MIT だって、国際政治学や経済学の学科があるし、その有名な研究者がいっぱいいて、ノーベル賞をとった人もいるよなあ」

「英語の校名も、Nagaoka Institute of Technology として、通称 NIT とするんだ」

「カッコいいじゃん。卒業後は、文科系の大学へいっぱい編入学してさ、高専出身の哲学者や、弁護士や、歴史学者、政治学者、経済学者、文学者たちが、社会でいっぱい活躍しているとしたら、すげえじゃん」

こんな話し声を、いつ自分の名前が出てくるかと、ひやひや、わくわく、しつつ聞いていた。40年くらい前の自分の姿を、ふと、思い浮かべた。時代は変わっても、青春は変わらない。こういう日々を送りながら、みんな成長していく。今から10年や20年後の彼等の姿が楽しみだ。

2005年 早春